

# 愛媛の柿栽培地域の形成と変貌

窪田重治

はじめに

愛媛県農業基本対策審議会(1951)は「戦後のわが国農業の在り方について、土地を最も有効に利用するためには、適地適作であることを前提に、本県は果樹栽培の立地条件が好適であり、農家1戸当り経営面積が零細であるから、普通作物に比較して土地・労働生

産性がともに高い果樹栽培が今後一層必要である。」(1951 p128)と、果樹増植5ヶ年計画によって、3,449町歩の増植計画をたてている(第1表)。

増植果樹の基幹は柑橘類で、温州みかんが1,300町歩(37.7%)を占め、落葉果樹では甘柿の富有柿と渋柿の愛宕柿の590町歩(17.1%)が主である。

1961(昭和36)年に農業基本法が制定され、果樹農業振興特別措置法、特に農業構造改善事業によって、みかんが選択的拡大の花形成長作目に取り上げられ、みかん農業は政策主導の展開が進んだ。

愛媛県では、1959(昭和34)年のみかん栽培面積7,524haが、10年後の1968(昭和43)年には20,734haとなり、年間1,321haのペースで増加し、1972(昭和47)年には最高の23,955haに達した。

愛媛みかんの生産量は、1963(昭和38)年に日本一になり、1965(昭和40)年には栽培面積でも日本一のみかん王国になった。昭和30年代のみかん景気は、平地の田畑や落葉果樹園のみかんへの転作を促し、山間地の冷涼地にまでみかん園を造成した。一方で柿畑は急速に減少した。その結果、単一耕作化したみかん産業は、1972(昭和47)年の大豊作(61万3,150t)で豊作貧乏の経済的打撃を受けた。

みかん産地では、生産調整の減反、みかん専作からの脱皮が急務となり、1973(昭和48)年から1977(昭和52)年にかけて、品種更新による産地再編が進んだ(窪田 1997 pp34~51)。

2000(平成12)年の愛媛県の果樹栽培状況(第2表)は、栽培面積では柑橘類が78.1%、生産量の91.8%で、温州みかんと伊予柑が横綱格である。柑橘類以外の果樹面積5,177.3haのうち、栗が2,983.2haを占め、柿は782.1haである。

愛媛県の柿の生産量は、全国的には和歌山県19.8%、福岡県10.7%、奈良県9.8%、岐阜県6.2%、愛知県5.5%に次いで6位である。最盛期は1963(昭和38)年の1,606haで、生産量も2万tに達する時期もあった(第1図)。

第1表 愛媛県の果樹増植5ヶ年計画

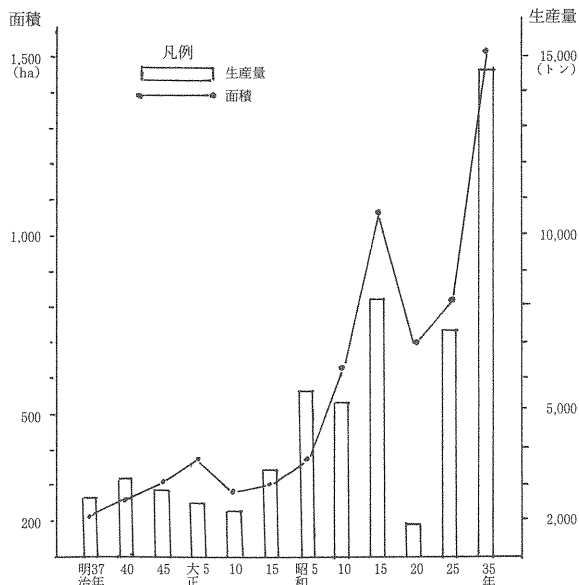
面積 1950(昭和25)年栽培面積		増植計画(昭和26年より5ヶ年間)	
種類・品種		6,667町歩	3,449町歩
柿	愛宕	320町歩	290町歩
	平核無	1	20
	富有	260	300
	その他	55	-
栗	銀寄	23	70
	赤中	155	160
	大松	-	50
	その他	60	-
桃	岡山早生	20	150
	養島白桃	-	70
	その他	185	-
梨	長十郎	170	50
	君塚早生	-	50
	その他	108	-
枇杷	田中	150	70
	茂木	40	15
葡萄	デラウエア	3	20
	キャンベルスアーリー	27	80
	マスカットベリーA	-	4
柑	尾張温州	3500	1000
	宮川早生	400	300
	夏橙	920	400
橘	伊予柑	260	340
	ネーブルオレンジ(輪久森系)	-	10

資料：愛媛県農業基本対策審議会1951「愛媛県農業の概況」p128より作成

第2表 愛媛県の果樹種類別栽培状況 2000(平成12)年

	栽 培 面 積 (ha)				生 産 量	
	未 成 園	成 園	計	%	(t)	(%)
果樹合計	1,980.6	21,657.7	23,638.3	100.0	355,281.2	100.0
柑橘類計	1,147.4	17,313.6	18,461.0	78.1	326,027.8	91.8
温州みかん	566.7	8,124.6	8,691.3	36.8	143,711.8	40.5
夏みかん	0.7	878.5	879.2	3.7	14,049.8	4.0
ネーブルオレンジ	2.5	200.0	202.5	0.9	1,790.3	0.5
伊予柑	158.5	6,216.9	6,375.4	27.0	137,269.0	38.6
八朔	0.1	348.8	348.9	1.5	4,750.8	1.3
その他の柑橘	418.9	1,544.8	1,963.7	8.3	24,456.1	6.9
柑橘類以外の果樹計	833.2	4,344.1	5,177.3	21.9	29,253.4	8.2
りんご	0.5	17.0	17.7		169.2	
ぶどう	23.9	161.5	185.4	0.8	1,636.9	0.5
梨	3.8	93.4	97.2		1,502.0	0.4
桃	17.3	108.8	126.1	0.5	964.4	0.3
桜桃		1.0	1.0		0.1	
枇杷	5.7	117.9	123.6	0.5	562.2	0.2
柿	67.9	714.2	782.1	3.3	10,723.6	3.0
栗	612.2	2,371.0	2,983.2	12.6	1,501.7	0.4
梅	88.6	191.2	279.8	1.2	1,184.5	0.3
すもも	1.3	30.4	31.7		239.2	
キウイフルーツ	3.0	484.6	487.6	2.0	10,391.4	2.9
その他の果樹	9.0	52.9	61.9		378.2	

資料：愛媛県農林水産部農蚕園芸課 2000年 果樹統計資料により作成



第1図 愛媛県の柿の栽培面積と生産量の推移

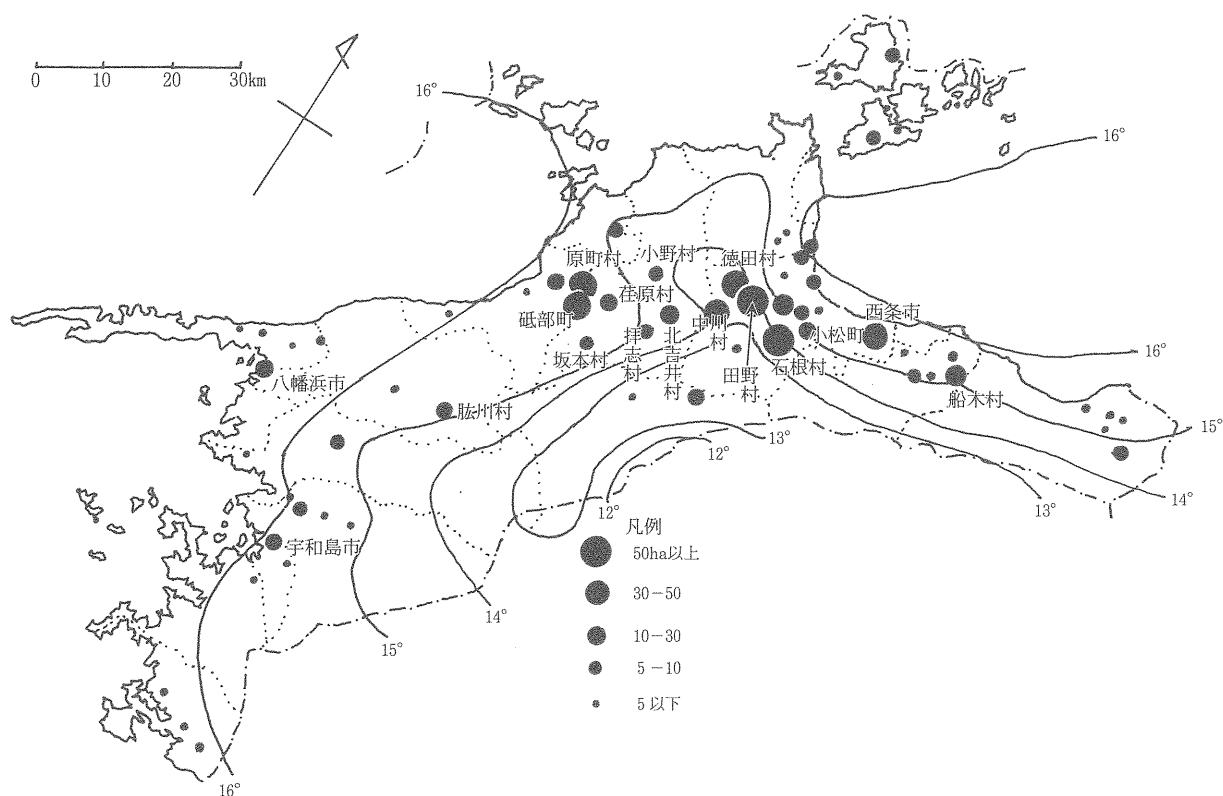
出典：愛媛県果樹研究同志会1983「愛媛のかき」p23による。

本稿は、秋の味覚を代表する落葉果樹の柿について栽培地域形成のプロセスとその変貌について考察する。

### 1. 柿の栽培地域の分布

柿は古くから自然の山野や畦畔、屋敷の隅などに在来種が点在しており、1910~11(明治43~44)年にかけて、農林省興津園芸試験場の調査によると、愛媛の柿は甘柿3種、渋柿31種が報告されている(阿川1988 p15)。

柿園として経済的栽培が始まったのは、大正初年(1912~25)からで、1947(昭和22)年農林水産調査では、周桑郡の山麓地帯が圧倒的に多く、周桑一帯で県全体の31.7%の栽培面積を占めた。西条市・新居郡船木村(現新居浜市)および越智郡以東の東予地域で大半を栽培している。これに次いで、中予地域の伊予郡原町村(現砥部町)と旧砥部町の16.2%と、温泉郡小野村(現松山市)・北吉井村(現重信町)を中心に



第2図 愛媛県の市町村別柿の栽培面積の分布 1949(昭和24)年

資料：愛媛県 1951「愛媛県農業の概況」第130図により窪田作成

東・中予の中山間地帯に散在した(第2図)。

柿には甘柿と渋柿がある。村上(1957 p57)は「甘柿の限界は太平洋岸では福島県, 日本海岸では新潟県の佐渡が営利的栽培の限界で, 寒い地域では甘柿が気温不足のため脱渋せずに渋柿となる。その限界は9月の平均気温が22~23℃で, 10月平均15℃線である。また, あまり暖地では甘柿は不適で, 鹿児島県の南部では成績不良で専ら伊予産の富有柿の販路である。」と記している。

1951(昭和26)年には, 周桑郡徳田村・田野村・中川村(現丹原町), 石根村(現小松町)を中心に一郡で232ha, 本県渋柿園の71.3%を占めた。甘柿の富有柿は, 伊予郡原町村36.0haと旧砥部町34.0ha(現砥部町)を中心に伊予郡が23.0%, 温泉郡が小野村11.3ha(現松山市), 北吉井村13.0ha(現重信町)を中心に11.7%を栽培し, 中予の内陸部で富有柿の3割を占め渋柿と甘柿の産地が地域的に明瞭な分化をしていた(第3表 第3図)。その他, 富有柿は宇和島市柿原など, 小面積ながら南予地方にも分散的に栽培されていた。

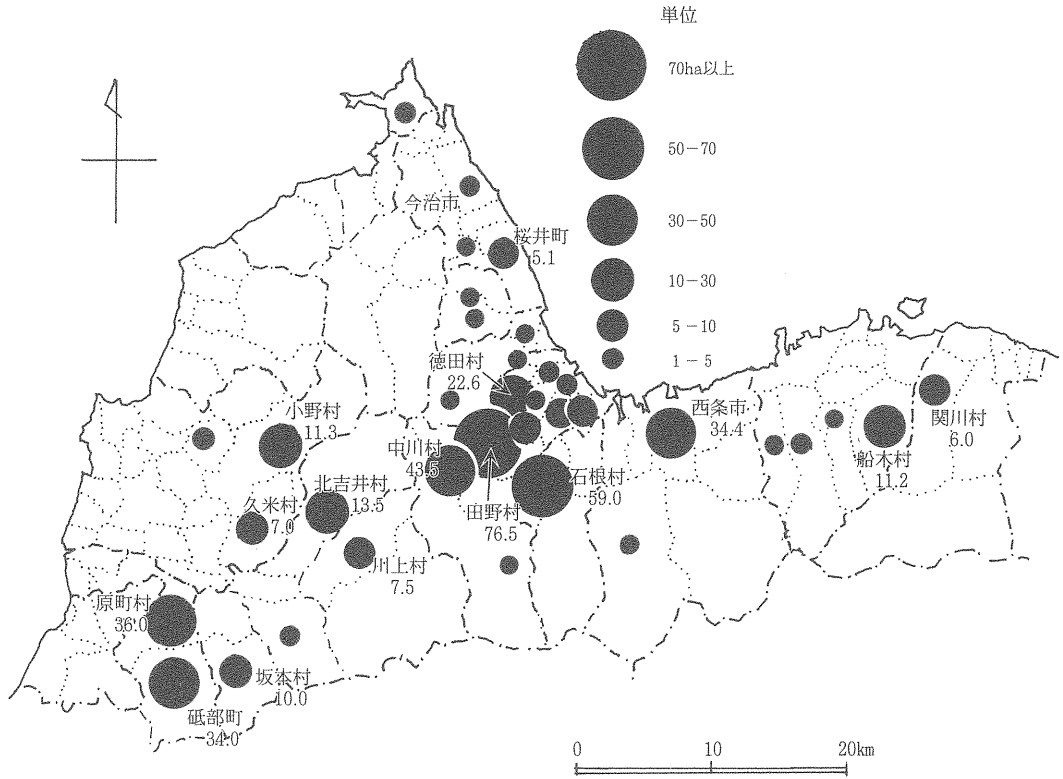
第二次世界大戦後の愛媛の柿産地には大きな立地移動が生じている。主要産地の周桑郡丹原町・小松町を中心とする関屋川扇状地の平坦部から両町南部の山麓地帯および松山平野東麓の桑原・久米・小野・北吉井地区, 松山平野南麓の久谷から砥部盆地山麓地域に対し, 喜多郡内子町を中心とする中山間地帯における富有柿の新興産地が台頭してきたことである。

喜多郡内子町の柿栽培の歴史は新しく, 1933(昭和8)年大瀬村(現内子町)の上岡進が, 伊予郡砥部町から富有柿の穂木を導入して育苗したのが始まりである。

2000(平成12)年の愛媛県の柿栽培面積は782.1haで, 渋柿が479.6ha(61.3%), 甘柿302.5ha(38.4%)の割合である。渋い愛宕柿と甘い富有柿が6対4の割合で競争関係にある。渋柿の主力産地周桑郡丹原町(153.3ha)・小松町(39.7ha)・東予市(29.1ha)の1市2町の栽培面積は214.9haで県下の44.8%を占めるが, 甘柿は5.2haにすぎない。富有柿の先進産地伊予郡砥部町も渋柿産地に変貌している。

喜多郡を中心とする南予の中山間地帯は, 甘柿が主

愛媛の柿栽培地域の形成と変貌



第3図 1951（昭和26）年の東・中予の市町村別柿集団栽培面積の分布

資料：愛媛県(1952)「愛媛県市町村勢要覧」により 窪田作成。

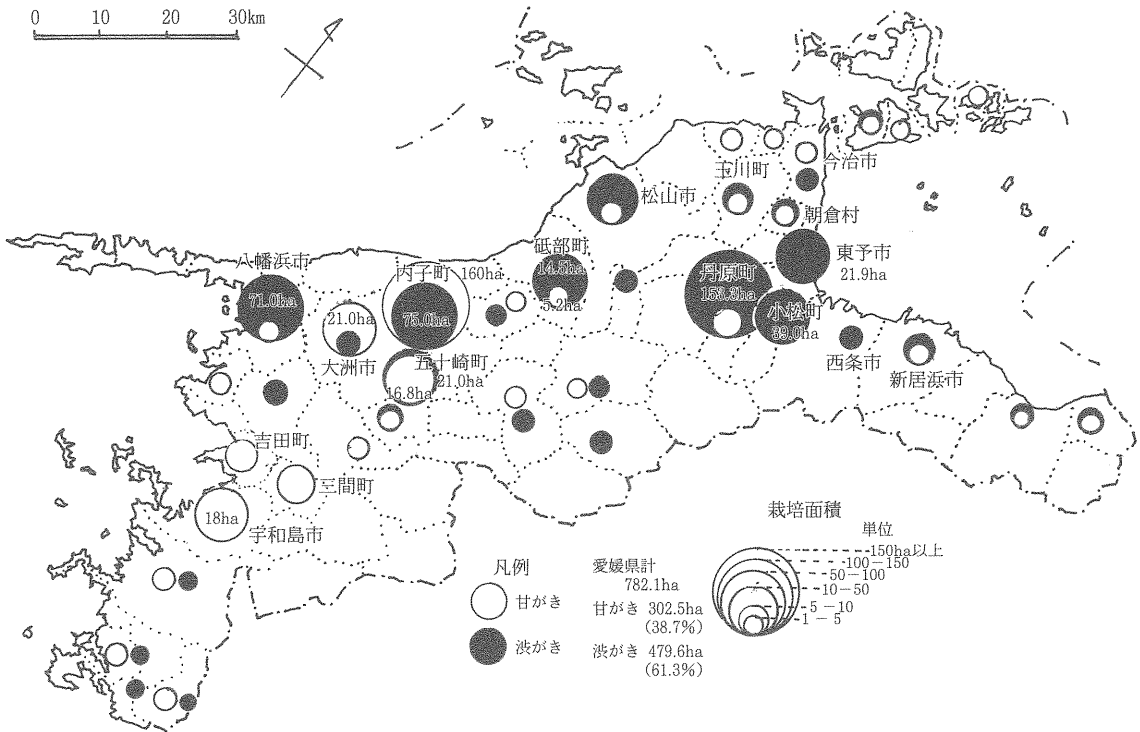
表3 1952（昭和27）年の愛媛県の郡市別の柿栽培面積

	甘柿	渋柿	計		甘柿	渋柿	計
温泉郡	488反	170反	658反	東宇和郡	135反	21反	156反
	11.7%	2.8%	6.5%		3.2%	0.3%	1.5%
越智郡	212	228	440	北宇和郡	229	19	248
	5.6	5.1	4.3		5.5	0.3	2.4
周桑郡	1,005	4,268	5,273	南宇和郡	38	13	51
	24.1	71.3	51.9		0.9	0.2	0.5
新居郡	20	359	379	松山市	11	—	11
	0.5	6.0	3.7		0.3		0.1
宇摩郡	117	204	321	今治市	11	13	24
	2.8	3.4	3.2		0.3	0.2	0.2
上浮穴郡	47	60	107	宇和島市	200	22	222
	1.1	1.0	1.0		4.8	0.4	2.3
伊予郡	960	30	990	八幡浜市	112	60	172
	23.0	0.5	9.7		2.7	1.0	1.7
喜多郡	390	100	490	西条市	58	389	447
	9.3	1.7	4.8		1.4	6.5	4.4
西宇和郡	134	33	167	県計	4,167	5,989	10,156
	3.2	0.6	1.6		100.0	100.0	100.0

資料：愛媛県 1954 愛媛県農業振興計画書第一次 愛媛県農業経済研究所報 第12号 p49による。

力で、内子町160ha、大洲市21ha、五十崎町16.8ha、この大洲・喜多地区1市2町で197.8haを栽培し、愛媛の富有柿園302.5haの65.4%を占めている。他に宇和島市18ha、北宇和郡三間町・吉田町など各々10ha

余を栽培し、東予の渋柿と南予の甘柿地域に分化している。八幡浜市の71haは富士柿の単一産地である（第4図）。



第4図 2000（平成12）年の愛媛県の市町村別柿栽培面積の分布

資料：愛媛県農林水産部園芸農蚕課 2001果樹統計資料により窪田作成

## 2 周桑平野山麓の柿栽培の展開過程

周桑平野の南縁は直線的で、石鎚山地に付着する台地群や扇状地が連続し、中山川の河岸段丘面には氾濫堆積物があって円礫が散乱している。西縁の山麓には関屋川・田瀧川が形成した複合扇状地が展開し、北方には大明神川の扇状地が形成されている（第5図）。

関屋川扇状地は、東西南北ともに4kmに及ぶ複合扇状地で、扇頂付近は関屋川・田瀧川が各々勾配のちがった小扇状地を形成しつつ合流し、扇中央から扇端にかけて急に160度の裾を開く。扇端には北田野・長野・石経・来見の集落が立地して中山川氾濫原と接し、来見・石経にかけて中山川の側方浸食を受け、小崖を形成している。これらの地形は砂礫の露出した耕土の薄い乏水性の土地で、水田化が困難で開発がおくれた。

土地利用は、藩政時代に工芸作物の櫛を栽培してか

らである。明治に入って日露戦争後（1905～）、養蚕業の勃興とともに桑畑に利用されていった。

櫛の栽培は『愛媛県農事概要』（1891, pp123～124）によると「宝暦ノ頃（1751～63）松山城山ノ内、小谷・北郭・外渥ノ塘、三津街道ノ暇、温泉郡石手川堤上空地ニ試植セシヲ創始トス。然ルニ其頃培養法ニ熟セサルヲ以テ生育宜カラス多クワ枯損セシカ、松山市湊町二丁目大濱屋喜兵衛号要峰ト言シモノ種芸ノ道ニ志篤クシテ安永三（1774）年午歳前記ノ場所ノ外尚ホ久米郡北梅本村播磨塚、温泉郡道後堀端ノ閑空地、石手川堤上石手総門ノ西ヨリ久米郡和泉村マデノ間数ヶ所、和気郡祝谷村御幸村裏山ソノ他ノ地ヲ永年貸下ノ許可ヲ藩庁ヨリ得自費ヲ以テ之ヲ開拓シ筑後国久留米田主丸ヨリ精選ノ櫛実七種及ビ苗木ヲ買求メ其種実ヲ祝谷山ニテ苗木ニ仕立テ各地ニ移植栽培セリ。是ヲ以テ喜兵衛ヲ櫛栽培家中ノ率先者トセリ。



第5図 周桑平野山麓地帯の土地利用  
 地理調査所 1953 [1906 (明治39)年測図。1928 (昭和3)年修正測図。1953 (昭和28)年資料修正。] 5万分の1 西条図幅地形図

喜兵衛此業ニ熱心ニシテ之ヲ地方ノ産物トナサンカ  
為ニ、久米郡ハ梅本村・志津川村・西岡村・山之内村・  
北方村字旦之上・水尻村ニ、上浮穴郡窪野村・久谷村  
ニ、下浮穴郡ハ田窪村・牛淵村・見奈良村ニ、周布郡  
ハ志川村及来見・石経・長野・高松・川根・今井・久  
妙寺村、桑村郡ハ新町村及旦ノ上市村辺ニ、風早郡ハ  
山分村落ニ遊説シ終ニ同志ヲ誘導シ各地ニ種苗ヲ分與  
シテ試作セシメタルニ該品ノ有益ナルヲ知り漸ク栽培  
家ヲ増加シ今日ノ現況を見ルニ至リシモノナリ。」と  
記している。

村上(1950,p100)は、周桑郡の榎は享保年間(1716  
~35)に植えたと伝えられる。栽培地域は関屋川の扇  
状地に密集している。間作に茶を植えている処も多く、  
老木になって伐採し柿畑に変わった面積が広い。

周桑郡中川村(現丹原町)の王榎は特に有名で、最  
盛期には中川村だけで20万貫も収穫された。田野村長  
野(現丹原町)には榎畑が15町歩もあった。その榎が  
衰退したのは、電灯の普及、化学製品の開発などで特  
殊な用途以外に需要が減った。石根村(現小松町)が  
愛宕柿の原産地でこれが普及した。柿は4年目から収  
入があるのに対し、榎は採算がとれるまでに10年はか  
かるので歓迎されず、老木になると伐採され、いつの  
間に柿畑に変わっていった。また、農商務省の榎に  
対する補助が、1921(大正10)年ころに打ち切られた  
のも減少要因であったという。

1906(明治39)年測図の地形図によると、関屋川扇  
状地は全面に桑園が展開している。第5図の1953(昭  
和28)年資料修正図では樹園地になり、榎畑が展開し  
寺尾付近と大明神川扇状地に桑園が残っている。

『田野村誌』(1957.p312)は、「幕末から明治初年  
にかけて榎樹は接木によって王榎種に替えられ、関屋  
川・高松川流域一帯の畑はもちろん路傍にまで植樹さ  
れ、その間作には主に楮が植えられた。最も広く栽培  
されはじめたのは、安政以後明治末期までである。

資産家は榎畑の除草の手間を省くため、間作を無料  
で小作させるのが普通であった。榎の種類は田瀧・中  
川ともに王榎種で上品質であった。南予産のものは、  
周桑産の榎を混入しなければ蠟の漂白が不良のため、  
その大半が喜多郡長浜港に輸送された。」と記してい  
る。

日露戦争後(1904~05)、養蚕業の勃興とともに榎・  
楮畑は桑園に変わった。1929(昭和4)年には世界恐  
慌の影響を受け、農産物価格が暴落し、とりわけ繭価

は人絹の開発およびその消費の伸びにより激甚の被害  
を蒙り、不用桑園が各地に続出しその整理が始まった。  
農村更生の施策として、桑園の後作に副業としての果  
樹作を奨励した(小林 1986,p64)。

周桑郡・新居郡の山麓地帯・関屋川の扇状地の榎畑  
は、大部分大正10年から昭和10年(1921~35)代にか  
けて愛宕柿畑になり、栽培面積が急増した。周桑特産  
の渋柿「愛宕柿」は、1913(大正2)年田野村長野  
(現丹原町)の榎部国三郎が優良種の選出に成功して  
普及した。榎部は温泉郡桑原村東野(現松山市)の久  
松農園の技術員であった。彼の偉業の蔭には、周桑郡  
農会長日野松太郎の助力があった(村上 1951.p90)。

愛媛の柿の全盛期は、1941(昭和16)年の1,901ha  
を頂点とし、大戦中の肥料・農薬・労力不足と食糧増  
産第一主義の関係から、1944(昭和19)年果樹2割伐  
採令で皆伐・間伐を余儀なくされ、栽培面積は半減し  
た(第4表)。

第4表 愛媛の柿栽培の推移

年次	栽培面積	収穫量
大正5年	313反	625貫
10	386	776
昭和元年	—	1,229
10	963	1,450
11	1,145	1,596
12	1,283	1,753
13	1,442	1,372
14	1,484	2,227
15	1,237	2,445
16	1,901	2,073
17	1,602	1,877
18	1,497	1,550
19	866	1,419
20	702	515
21	624	295
22	609	2,474
23	609	1,102
24	662	1,454
25	610	2,486
26	783	1,924
27	1,016	1,242

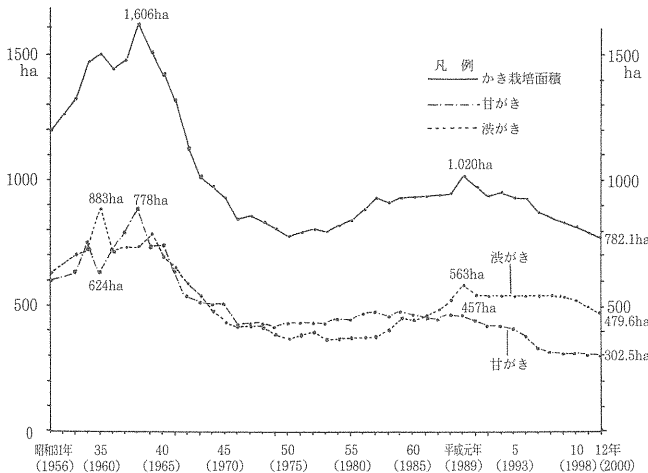
資料：愛媛県 1954 愛媛県農業振興計画書 第1次愛媛県農業経  
済研究所報 第12号 p49による

戦後、愛宕柿に愛着心の強い篤農家によって、新植  
による再建が計られ、周桑特産果樹としての愛宕柿の

産地再生がみられる。

### 3. 柿栽培の推移と富有柿産地

柿畑は戦時中の整理伐採によって著しく減少した。戦後徐々に増植され回復して、1963（昭和38）年には1,606haにまで達したが、みかんブームに圧倒され、温州みかんの適地は柿を伐採して温州みかん園に転換したため、柿畑は再び減少した（第6図）。



第6図 愛媛の柿栽培面積の推移（1956～2000年）

資料：愛媛県農林水産部農蚕園芸課 果樹統計資料により窪田作成。

愛宕柿の主産地周桑郡丹原町（第5表）、富有柿の先進地伊予郡砥部町でも改植が進み、温州みかん園が展開した。一方、柑橘栽培に不適な喜多郡内子町を中心とする南予の中山間地域に新興の富有柿産地の転移形成がみられた（第7図）。

柿は海岸地帯よりも、中山間地帯や山麓地帯の方が着色が鮮やかで品質もよい（愛媛青果連 1968 pp.310～311）。愛宕柿の主産地周桑郡丹原町の温州みかん栽培は『田野村誌』（1957 p.406）によると、1907（明治40）年ころ沼田藤吉が温州みかんを植えたのが初めて、1913（大正2）年沼田富平が温泉郡興居島村（現松山市）から導入している。

川久保（1996 p.36）は「戦前は養蚕および柿栽培が普及する一方で、みかん栽培は急増せず、みかんが米と並んで丹原町の基幹作物となるのは、農業基本法に基づく農業構造改善事業の成果のあらわれた1966

（昭和41）年以後である。」という。1980（昭和55）年代に入ると、農家の兼業化と農業従事者の高齢化が顕著であり、若年専従者の不在を反映して耕作放棄地が1985（昭和60）年以後著しい。みかん園の減少は、伊予柑など他柑橘や柿などへの転作によって進んだが、1985（昭和60）年以後は他柑橘も減少し、果樹作の中心は愛宕柿へ回帰している（第5表参照）。

愛媛の柿の26.4%（2000年）を占める富有柿の先進地は伊予郡砥部町である（第6表）。甘柿の主要品種である富有柿は、1906（明治39）年砥部村岩谷口の日野陽二郎・日野富三郎が東京帝国大学農学部の学生時代に、帰省の際、岐阜県より富有柿の苗木数本を持ち帰り、陽二郎が植えたのが始まりである。経済的開園は1918（大正7）年で、伊予郡原町村七折（現砥部町）の小笠原葵・宮内の高市亀太郎が富有柿園を開いたのが最初である（砥部町教育委員会 1969 pp.43～45 砥部町 1978 pp.476～477）。

第6表 愛媛県産かきの品種構成（2000年）

面積 品種	県その他共計		品種	ha	%
	782.1 ha	100.0 %			
愛宕	225.3	28.8	平核無	6.1	0.8
刀根早生	97.3	12.4	富有	206.3	26.4
富士	71.4	9.1	松本早生富有	48.7	6.2
横野	48.7	6.2	次二郎	17.2	2.2
西条	11.2	1.4	早生系次郎	10.5	1.3
早生西条	6.0	0.8			

資料：愛媛県農林水産部農蚕園芸課 2000 果樹統計資料 により窪田作成。

富有柿は、岐阜県本巣郡巣南町居倉が原産で、原木は文政3（1820）年ころ、居倉の小倉初衛の祖母の代に、母家の裏の竹藪付近に植えた大御所という柿から発見されたといわれる。1899（明治32）年11月4日岐阜県農会の柿展覧会に、小倉初衛の近所に在住した福島才治が、果実をもらい受けて出品し、一等賞を得た。1903（明治36）年12月1日に、関西府県連合会共進会が岐阜市で開催され、再び当該果実を出品して一等賞を獲得した。

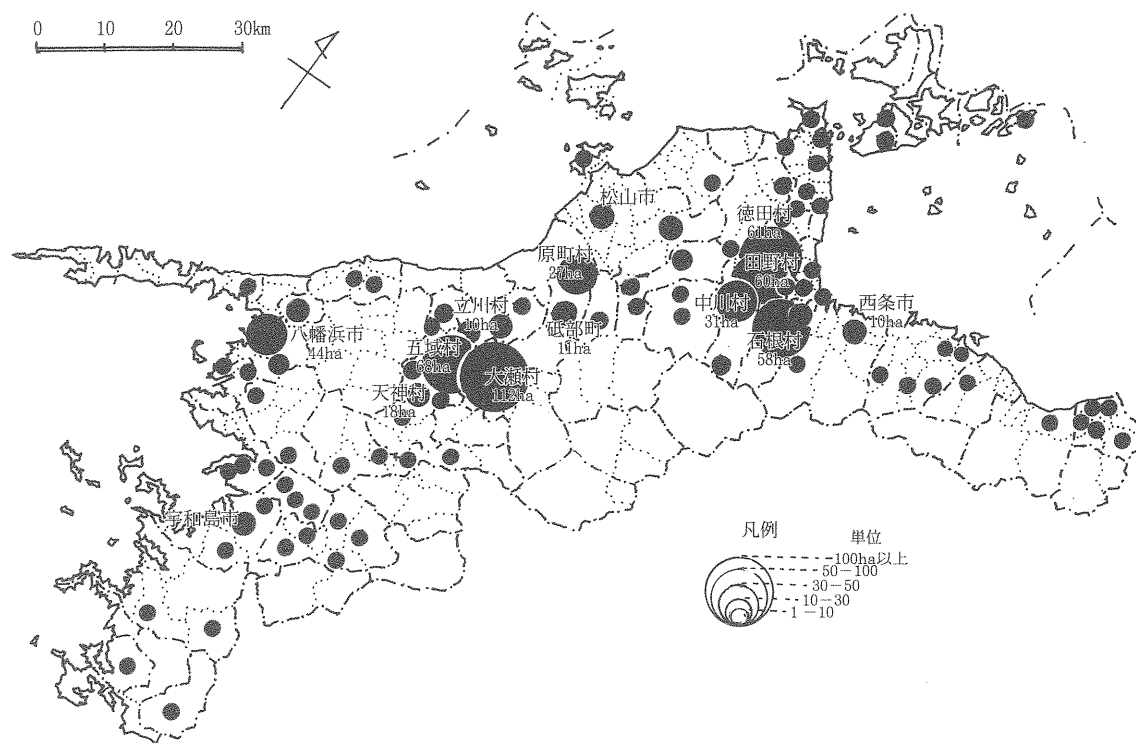
農林省興津園芸試験場長恩田鉄弥博士が、積極的に推薦して県内外に広く知れわたり、庭木として栽培するものが増加し、大正初期に経済栽培されるに至った。命名は1892（明治25）年福島才治が「富有」と命名



第5表 周桑郡丹原町の果樹栽培面積の推移 (1965~2000年)

種類	年次	1965 (昭和40)	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
果樹・その他共計		708 ha	808 ha	742 ha	734 ha	704 ha	609 ha	561 ha	373.4 ha
常 緑 果 樹	み かん	292	510	445	228	262	162	132	72.7
	夏 柑	8	10	9	9	6	3	3	0
	ネーブルオレンジ	0	1	6	17	7	4	2	0
	伊 予 柑		34	71	129	135	113	96	48.4
	八 朔		29	43	59	40	9	6	2.8
そ の 他 柑 橘									2.6
落 葉 果 樹	ぶ ど う	8	6	4	5	5	2	1	0
	も も	42	4	0	3	7	5	4	—
	び わ	2	2	1	1	0	0	0	—
	う め	2	4	4	—	—	—	—	—
	か き	312	168	129	141	156	189	197	158.2
	く り	25	31	27	22	17	14	13	—
	日 本 梨	—	1	—	2	5	2	2	—
	キウイフルーツ	—	—	—	—	62	81	58	41.9
	す も も	—	—	—	2	14	2	0.4	0.4

資料：愛媛県農林統計協会 1977~1997 愛媛県市町村別統計資料。愛媛県農林水産部 2000 果樹統計資料 により窪田作成。



第7図 1985 (昭和60) 年旧市町村別柿の栽培面積

資料：農林水産省 1985 農業センサス により窪田作成。

したという（農林統計協会 1972 p156）。

伊予郡原町村宮内（現砥部町）の高市亀太郎は、岐阜県から富有柿の苗を取り寄せ植え付けたが、病虫害と自然落果のため採算が取れなかった。高市亀太郎は先進地の岐阜県・岡山県の産地を度々視察して、栽培技術の習得に努めた（愛媛県青果連 1968 p95）。

『いよのくだもの』（1932 p28）は「原町村高市義昭氏の十五年生の富有柿園は最も知られたるものである。最近、原町・砥部を魁に伊予郡一円、温泉郡久米・桑原を中心に柿園を開くものが多数に及んだ。これらは多くは富有柿であるが、愛宕・横野・蜂屋等も次第に増しつつある。」と記している。

1937（昭和12）年ころから、生産安定のため生理落果の防止に環状剥皮<sup>1)</sup>を多用した時期もあった。整枝法も盃状形から開心自然形、さらに変則主幹形へと変遷した。冬季には幹や枝の粗皮を削り、ヘタムシ（カキミガ）の越冬幼虫を駆除する粗皮削りなど、地味な作業が施された。

喜多郡の富有柿栽培は、1933（昭和8）年大瀬村（現内子町）の上岡進が、伊予郡砥部町から富有・愛

宕の穂木を導入して育苗し、1934（昭和9）年富有20a・愛宕20aを定植したのが始まりで、光井実定・有吉重雄も各々富有20a・愛宕10aを植え付けている。1941（昭和16）年初結果がみられ、大洲・内子町内の小売商店に卸し、終戦まで販売していた。

喜多郡内での栽培の歴史は新しいが、活発な生産者組織活動によって、全国や県の共進会で上位入賞を果たした。1935（昭和10）年から栽培法の研究・研修を重ね、1951（昭和26）年には県母樹園の指定と技術員設置および新植園の助成を受けた。1958（昭和33）年と1960（昭和35）年には選果場を建設した。こうして大瀬・五城・立川（現内子町）を中心に、県下最大の富有柿産地を形成した。隣接の天神（現五十崎町）は国営農地開発事業等により栽培面積が増加した（第7表）。

宇和島市柿原は富有柿・次郎柿の優秀産地として知られる（第7表参照）。1916（大正5）年山口惣市によって導入された。増植は1934（昭和9）年ころからで、直接の要因は柿原の農家経済を支えていた養蚕の不況である。養蚕にかわる産業として甘柿の富有柿の

第7表 愛媛県の主要柿産地の品種構成 2000（平成12）年

市町村	品種	愛 宕	刀根早生	横 野	富 士	富 有	松本早生富有	早生系次郎	次 郎	その他共計
東 予 市		4.9ha 22.2%	9.6 43.4	7.4 33.5						22.1ha 100.0%
小 松 町		33.8 84.9	2.0 5.0	3.1 7.8						39.8 100.0
丹 原 町		98.1 62.0	9.6 10.4	36.3 22.9		3.1 1.9				158.2 100.0
砥 部 町		0.5 2.5	14.0 71.0			2.5 12.7	0.5 2.5			19.7 100.0
大 洲 市		5.5 20.4				18.0 66.7	2.5 9.2			27.0 100.0
内 子 町		33.0 14.0	40.0 17.0	0.5 0.2		115.0 48.9	40.0 17.0			235.0 100.0
五 十 崎 町		19.5 51.6	1.5 4.0			14.0 37.0	2.8 7.4			37.8 100.0
八 幡 浜 市			0.7 1.0		70.3 96.0	2.2 3.0				73.2 100.0
宇 和 島 市		0.5 2.5	0.2 1.0			8.0 40.0	1.5 7.5	4.0 20.0	2.5 12.5	20.0 100.0
県 計		225.3 28.8	97.3 12.4	48.7 6.1	71.4 9.1	206.3 26.4	48.7 6.2	10.5 1.3	17.2 2.3	782.1ha 100.0%

資料：愛媛県農林水産部園芸農蚕課2001 果樹栽培状況等表式調査 により窪田作成。

栽培が本格化した。柿原の富有柿は品質がすぐれ、市場評価も高く、共進会で農林大臣賞を受賞している。(愛媛県果樹研究同志会 1983 p31)。

次郎柿は甘柿で『果樹農業発達史』(1972 p157)は「弘化元(1844)年静岡県周智郡森町の松本次郎吉が太田川堤防決壊のため役夫として普請に従事中幼木を発見し、持ち帰って裏庭に植えた。1870(明治3)年1月21日火災により柿の木も焼けたが、春根株より発芽し数年後に結実完熟に及び之を味うに、その美味云うべからず、時の人その名をとりて次郎柿と称す。」とその由来を記している。

八幡浜市特産の富士柿は、隔年結果性がなく多収穫性の柿である。1926(昭和元)年天皇即位記念樹として農会から配布された苗木の中から、八幡浜市国木の井上三郎右衛門が2本の富士を育成した。1957(昭和32)年富士生産者4名が組織をつくり、九州市場に1.5t出荷した。現在八幡浜青果農協柿部会に発展し、栽培面積70.3ha、県内産の98.5%を栽培している(愛媛県果樹研究同志会 1983 p31)。

#### 4. 周桑特産愛宕柿産地の変貌

県下最大の渋柿産地周桑郡丹原町(158.2ha)の品種構成は、愛宕62%、横野22.9%、刀根早生9.6%(第7表参照)、甘柿の富有は1.9%にすぎない。東予園芸管内でも、昭和50~60年代には愛宕柿が8割を占める特産物であった(第8表)。

愛宕柿の由来について『小松町誌』(1992 pp1126~1129)は、「聖武天皇神亀年間(724~728)石根村大頭(現小松町)に、京都の貴船神社を勧請のとき、祭事に供した柿が京都の愛宕産であったためその名がついた。その時苗木数本を移植し、天保年間(1830~1843)にその中で良果が得られたものの穂木で繁殖し

たともいわれている。」と記している。

1913(大正2)年丹原町長野の榑部国三郎が愛宕柿の穂木を持ち帰って接木した。その中から品種の良い系統を選抜し、1917(大正6)年田瀧の荒山を開いて植え付けた。1918(大正7)年今治市で開催の品評会に出品し入賞したので、優良系統として育苗し普及につとめた。1923(大正12)年ころから、周桑郡農会が苗木仕立の経験者榑部国三郎に委託して苗木の育成を計り、郡内外に分譲して普及した。

渋柿は<sup>さわしかき</sup>醜柿(渋抜柿)および干柿として用いられるが、愛宕柿は明治・大正年間には干柿用に限られていた。昭和の初年渋抜に清酒が利用され、生柿としての販路を開拓した。次いでガス渋抜法の進歩により、最晩生種としての需要がたかまり、1929(昭和4)年ころから周桑郡の特産愛宕柿の集団産地の基盤が確立した(第8図)。

特に田瀧は砂礫質の土壌で排水が良好である。しかも南斜面で日照もよく、他産地ものに比較して実が固く完熟がおそい愛宕柿の銘柄産地である。晩熟で競争相手が少なく、柑橘類のように貿易自由化によるライバルもない。田瀧の生産者は、田瀧出荷組合を結成して独自に渋抜して、長崎・宮崎・鹿児島・呉・大阪・高知・松山などに出荷している(丹原町 1971 p 536)。

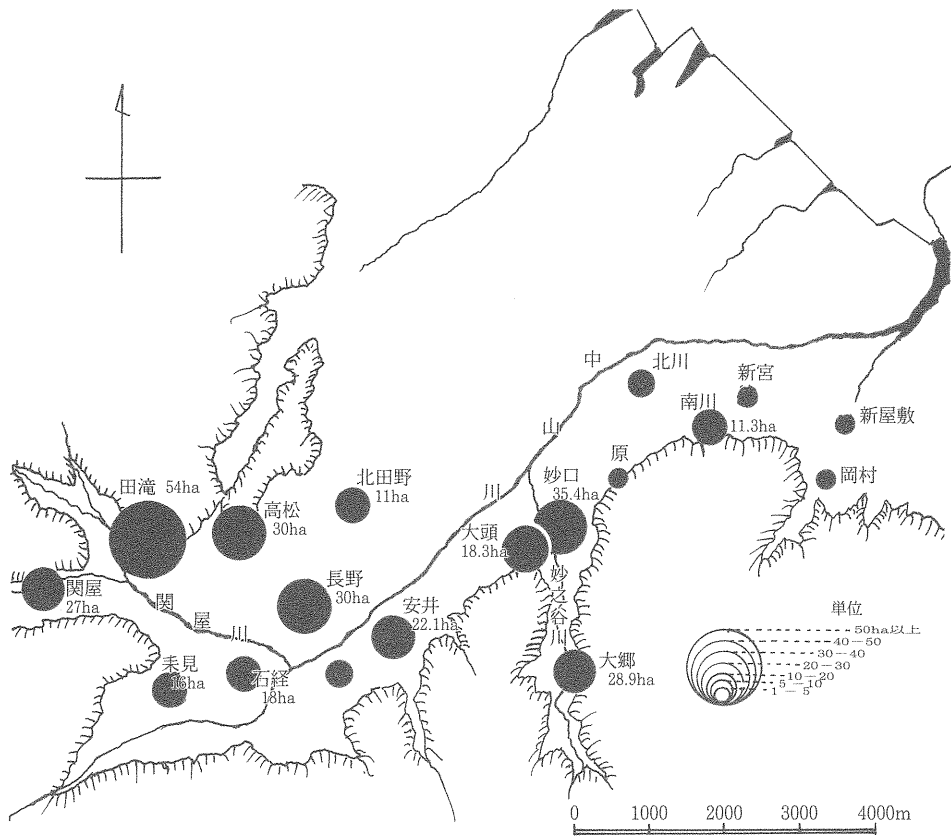
愛宕柿は豊産性で生理落果は富有柿ほど問題はないが、<sup>へたむし</sup>蓇虫(カキミガ)の被害が大きかった。整枝剪定も愛宕柿は円錐形整枝法が採用され、樹高も約5mに達する比較的高いものが多い。剪定・採取作業には脚立や手元操作で高低調節も自由自在に、柿の樹間を器用に移動する高所台を使用している。柿の玉も元は30匁(112.5g)位であったが、改良され80匁(300g)の大玉になった。

愛宕柿の生産のピークは1963(昭和38)年で、栽培

第8表 東予園芸農協管内の柿の生産目標

品種	年次	1982(昭和57)年				1990(平成2)年			
		栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量	栽培面積	収穫量
愛宕		225ha	85.6%	4,200t	92.9%	250ha	80.1%	5,000t	84.7%
西村早生		8	3.0	20	0.4	15	4.8	200	3.4
刀根早生		10	3.8	—	—	30	9.6	400	6.8
富有		20	7.6	300	6.6	17	5.4	300	5.1
合計		263	100.0	4,520	100.0	312	100.	5,900	100.0

資料：愛媛県果樹研究同志会 1983 愛媛のかき p25による。



第8図 周桑郡丹原町・小松町の地区別柿栽培面積

資料：1965（昭和40）年 農林業センサス により窪田作図

面積420ha，生産量10,500 t，全国シェア85%を占めた。脱渋技術が確立していなかった時期には，渋柿のまま出荷し，市場で脱渋していた。地元では干柿にするか湯抜きで地元の小売商店に売っていた。湯抜法は自家用として1955（昭和30）年ころまで続いた。

販売用の脱渋は，昭和初期から昭和14年ころまで，四斗樽に清酒を入れる樽抜法，のち焼酎に変わった。村上（1957 p58）は「焼酎抜にして年末に東京に主に送り，忘年会の酔ざめ用として歓迎され，京浜市場まで販路を拡大した。」という。

1940～41（昭和15～16）年から炭酸ガスによるガス抜法が開発され，1954（昭和29）年ころまで続いた。ガス抜法は渋が残り果実が黒変しやすく商品価値を低下することから，脱渋技術の良否によって商品としての価格が左右された。1958（昭和33）年ころからポリ袋によるアルコール脱渋法が開発され，産地での脱渋となり『アタゴコールド』の名称でイメージアップを計った。容器も木箱からダンボール箱15kgと10kg入りに変わった。

1972～73（昭和47～48）年から，アルコールとドライアイスの併用，アルコールまたはドライアイスの単用の三つの方法がとられるようになり，輸送距離・販売時期および品質を考慮して，脱渋法・脱渋剤の使用量を加減する方法をとるようになった（小松町 1992 pp1125～1127）。

収穫された愛宕柿は，組合の選果場に集めて選別され，一週間ほどねかせる。その後ビニールを敷いた段ボール箱に，一箱30～40個ずつ詰められる。地元産の焼酎を70ccとドライアイス50gを入れ，ビニールの中の空気を電気掃除機で吸い出して密封する。一週間ほどすると渋が抜けて美味しい愛宕柿になる。

1966（昭和41）年，丹原町が農業構造改善事業で実施した中川・田野地区の果樹園灌水施設の一部が完成し，灌水を開始した。この事業は，1966（昭和41）年から3ヶ年計画で3億円をかけて実施したもので，完成したのは対象面積310haのうち第一・第二工区分120haである。面河ダムから送られた農林省道前左岸幹線水路の水を，関屋川たもとの県営ポンプ場の30.37

馬力二基のポンプで揚水し、小幹線水路を通じて農場に送水してスプリンクラーで自動散水している。7月～8月の干天炎暑に人工降雨で適期適量の散水灌漑が可能になったことは、果樹作農業の近代化および生産性の向上を確約したといえよう(窪田 1967 p29)。

1980(昭和55)年度落葉果樹高能率生産集団育成事業によって、国・県の補助金を得て事業費1億円で共同選果場を設置した。これによって規格統一均質出荷が可能になった。

愛宕柿は晩生種で11月下旬から12月中旬に収穫され富有柿の出荷が終わってから年末に出荷される。横野柿は山口県安岡本町大字横野(現下関市横野町)が原産地で、大果美麗で豊産性、日本で一番晩熟の柿である。丹原町で36.3ha栽培し、他に西村早生・刀根早生など早生系の新植もみられる。

甘柿は県内消費も多いが、県外出荷先は京浜・北九州、渋柿は京浜・京阪神・広島が主販路で、2000(平成12)年度は京浜市場が38%を占めた(第9表・10表)。

第9表 愛媛の柿の販路 1981年

種類	出荷数量	北海道	京浜	名古屋	京都	大阪	神戸
甘柿	3,804t	33	697	35	—	58	2
渋柿	5,195t	25	657	53	7	426	178
		広島	北九州	その他県外	県内	加工	
甘柿	92	220	966	1,701	—		
渋柿	466	84	2,458	588	253		

資料：愛媛県農林水産部農蚕園芸課1980 果樹統計資料により作成

第10表 愛媛の柿の出荷先 2000年

生産量	10,724t	100.0%	京阪神	741t	7.7%
販売量	9,650		その他県外	3,133	32.5
北海道	3		県内	1,627	16.9
関東	3,665	38.0	加工	471	4.9
名古屋	10		(商品化率 90.0%)		

資料：愛媛県農林水産部農蚕園芸課2001 果樹統計資料により作成

## 5. おわりに

1960(昭和35)年以後、全国のみかんブームによって、胴枯病<sup>2)</sup>の被害に悩んでいた愛宕柿園は改植され、みかん新植園に転換して愛宕柿の栽培面積は急激に減った(第11表)。

1972(昭和47)年のみかん価格暴落によって、品質的に恵まれない東予みかんは、特有の酸が強く皮が厚く、貯蔵して年明けに出荷する市場対応すら困難になり、安いジュース用みかんになってしまった。こうした状況下で田野地区450戸は、宮内伊予柑を中心とする晩柑類に品種更新の先導的役割を果たした(窪田 1981 p36)。

伊予柑の生産が軌道にのり始めた矢先の1981(昭和56)年2月異常寒波によって、中晩柑類は壊滅的打撃を受けた。被害総額290億円にのぼった。県寒害調査班は「異常低温という気象要因だけでなく、自然条件を無視した品種更新が原因」と総括した。

寒害を契機に柑橘栽培に意欲的な農家も、ある者はハウスみかんやアンコール・マーコットなどの施設園

第11表 周桑郡丹原町の果樹栽培面積の推移

果樹 年次	温州みかん	伊予柑	甘柿	渋柿	キウイフルーツ
1964	140ha	10ha	53ha	223ha	ha
1968	499	17	37	182	
1970	535	20	15	136	
1971	535	20	15	136	
1972	546.4	24.5	15	137.5	
1973	545	27	15	137.5	
・	・	・	・	・	
1979	329	145	25	112	
1980	338	146	25	116	
1981	311	142	25	118	7
1982	280	122	24	118	25
1983	293	121	38	123	47
1984	273	121	42	123	57
1985	262	121	44	126	62.0
1986	253	119	46	123	66.7
1987	254	118	47	123	84.0
1988	153	99	45	142	84.0
1989	142	89	45.3	145	84.0
1990	153	86.9	45.3	146.3	84.0
1991	139	86.9	45.3	146.8	84.0
1992	138	91.4	40.3	152.7	83.0
1993	112.9	66.9	40.1	141.3	56.0
1994	108.9	65.7	34.1	147.1	51.0
1995	101.6	62.3	7.0	149.9	44.1
1996	99.1	59.8	7.1	151.6	44.1
1997	92.3	57.0	5.3	156.7	41.7
1998	79.3	56.3	5.3	159.0	41.6
1999	72.7	48.4	4.9	153.3	41.4

資料：愛媛県農林水産部農蚕園芸課 果樹統計資料 により窪田作成

芸に取り組んだが成功例は少ない。キウイフルーツも一時的に急増したが、農業従事者の高齢化と後継者問題で耕作放棄による廃園化が進行している。また一方では、適地適作の原則に返り、適産の愛宕柿にきりかえた意欲的な栽培農家もみられる。

### 注および参考文献

1) 環状剥皮 剥皮部分より上方の炭水化物の濃度を高めることになるので、花芽の着生・落果防止、果実の品質向上、熟期の促進効果をもたらしたが、根への炭水化物の補給が少なくなるので、樹勢を損ずる原因ともなるとの理由で実施されなくなった。

2) 胴枯病 若木から成木にまで発生する。富有柿には殆どみられず、愛宕柿に激しく発病する。発病すると発芽しなかったり芽の伸びが弱く、新梢が萎凋しやがて枯死する。

阿川一美(1988)：『果樹農業の発展と青果農協』財団法人果樹振興桐野基金 p606

伊予果物同業組合(1932)：『いよのくだもの』p67

愛媛県農業基本対策審議会(1951)：『愛媛県農業の概況』p257

愛媛県内務第二課(1891)：『愛媛県農事概要』123～124「日本評論社1980明治中期産業運動資料研究第13号」p263

愛媛県青果農業協同組合連合会(1968)：『愛媛県果樹園芸史』p1104

愛媛県果樹研究同志会(1983)：『愛媛のかき』p56

愛媛県(1988)：『愛媛県史地誌Ⅱ東予東部』p851

川久保篤志(1996)：オレンジ果汁輸入自由化による産地の変貌—愛媛県周桑郡丹原町を事例に—『人文地理』48巻1号人文地理学会 pp28～47

窪田重治(1967)：愛媛県道前道後水利総合開発に関する地理学的研究『松山東雲短期大学研究論集』第3巻第1号 松山東雲短期大学 pp13～38

窪田重治(1997)：愛媛の温州みかん産地再編の動向と地域的特性 『愛媛の地理』第13号 愛媛地理学会 pp34～51

窪田重治(1981)：愛媛県における伊予柑産地の形成 『「社会科」学研究』第2号 「社会科」学研究会 pp28～38

小林章(1986)：『果物と日本人』日本放送出版協会 p235

小松町(1992)：『小松町誌』p1834

田野村誌編纂委員会(1957)：『田野村誌』p693

丹原町(1971)：『丹原町誌』p1429

砥部町教育委員会(1969)：『砥部町郷土資料第二集』p72

砥部町(1978)：『砥部町誌』p1231

農林省統計協会(1972)：『果樹農業発達史』p981

村上節太郎(1957)：本邦果樹の品種より見た栽培地域 『果樹研究』第二集からたち会 pp43～59

村上節太郎(1950)：愛媛県の榎および製蠶地域に関する地理学的研究 『愛媛大学紀要』第一部 人文科学第1巻第1号 愛媛大学 pp99～116

村上節太郎(1951)：愛媛県の果樹栽培地域の地理学的研究 『愛媛大学紀要』第4部 社会科学 第1巻第2号 愛媛大学 pp65～94